

船井情報科学振興財団 留学報告書

第四回

Department of Economics, Northwestern University

村上愛

Northwestern University に留学して二年目の秋が訪れました。進級要件に従うと、今年度も授業を中心としたカリキュラムが組まれています。研究三昧といかないのは残念ですが、昨年に比して、より専門分野に特化した授業を取ることが可能になっていることは幸いです。9月から12月まで続く秋学期には意思決定理論の授業を詰め込みました。

意思決定理論とは、個人が選択をおこなうときに満たされるはずの性質を明らかにし、数学を用いて記述、分析する分野です。そもそも、経済学では、意思決定というのは人々がもっている「好み」に基づいて行われると考えます。簡単な例を出してみましょう。Iさんがオレンジとレモンとネーブルから一つ選ぶとします。もちろんIさんは一番好きなものを選ぶと考えられます。この問題を数学的に考えると、あらかじめ「好み」という名の順序付けがされたオレンジとレモンとネーブルから、一番順序の高い果物を選ぶ問題として考えられます。このように、順序付けされた選択肢から、順序の一番高いものを選ぶというのが、意思決定問題の基本的な考え方です。

このように、順序付けがきれいにされていれば、意思決定問題を解くことができます。どのような順序付けがきれいといえるのでしょうか。経済学の分野では、合理的個人という言葉がよく用いられますが、これは、「好み」の順序付けが『合理性』の性質を満たした個人を考えるということです。経済学において『合理性』の定義は、人々の「好み」が以下の2つを満たすことです。1. どのような二つのものAとBを与えられても、AとBのいずれかがより好ましいか定まっていること。2. もしAのほうがBより好ましくさらにBのほうがCより好ましいのであれば、AのほうがCより好ましいという順序づけになっていること。言い換えると、Iさんがオレンジとレモンを比べるとオレンジのほうが好ましく、レモンとネーブルを比べるとレモンのほうがより好ましいのであれば、ネーブルのほうがオレンジより好まれることはないということです。

さて、現実の私たちの「好み」は上記の1と2を満たしているのでしょうか。数々の経済学の実験によると、人々の「好み」は常に『合理性』を満たすわけではないということが示されています。そこで、経済学の理論は、現実の人々の意思決定をより正確に記述するために発展してきましたが、今学期の授業はまさにこの発展の歴史をおうものでした。朝から夕方まで連日、今学期は意思決定理論を学んでいますが、数学的な手法も面白く、学ぶことは多いです。

夕方になり、授業が終わると、近くの公園に足をのばすようにしています。去年は留学して1年目ということもあり、なかなか散策しようという気分にもなりませんでした。今年は心の余裕をもう少し持とうと思ひ、意識的に外出を増やしています。実際、ぶらぶらと寄り道をしている間は無心になれるので、よいストレス発散になっています。公園につくと、

アメリカでは当たり前の風景ですが、リスが走り回っています。つい先日、枝の上で木の実をかじっているところを運よく撮影することができたので掲載します。横顔と正面から見た顔で印象がずいぶんと異なるので驚きました。近頃では秋も深まりを見せ、紅葉も美しく色づいています。ちょっと心の余裕が生まれることで、何気ない景色も素晴らしく見えます。氷点下になる冬が訪れるまで、帰りがけの散策は続けるつもりです。

